

箕輪成男著「学術情報としての出版」  
弓立社 1982.7

本書のタイトルはその内容をよく表わしている。この本は学術情報を出版の観点から追究した労作である。

本書の特長の第一は学術情報の生産と利用の全体像を定量的・客観的に描き出していることである。著者はそのために国内外のさまざまな資料を活用すると同時に、自らも一夏を『出版年鑑』と『全国学協会要覧』とを“愛読”して過し、現実的なデータの収集につとめた。その努力の結果のひとつとして著者は学術出版の量は全出版流通量の1パーセントでしかないことを明らかにした。そしてこの“僅かな部分”の課題を全出版流通の問題として扱おうのは誤まりで、学術情報をマンガや文芸作品と切り離して取り扱うことが問題解決への近道であるとしているのは傾聴に価する。

本書はまた、学術情報の流通が経済学的分析の対象となり得ることを明らかにした。著者の長年にわたる大学出版部経営の経験をベースとして、この部分は特に多彩な分析が示されている。そのような分析のひとつとして、学術情報流通に要する総費用に関するアメリカのデータから、論文1件当りの伝達経費を600万円とはじき出している（研究費は含まない）。これからのような結論を導くかは読者の自由であるが、この金額は学術情報の重みを示すものであり、情報の価値についての議論の始点ともなる。

本書の第三の特色は情報を通して“科学”そのものが研究されていることである。学術情報は科学研究の最終生成物である。ちょうど地震学者が地殻の下から来る地震波を分析して地球の内部構造を知るように、学術情報のいろいろな特性は科学と科学者を知る手がかりである。研究者の文献への依存度、情報流通の手段と速さ、インフォーマルな情報の割合などの定量的な分析をビブリオメトリクスと呼び、これをもとに科学の動態を明らかにする手法はプライス等によって広められた。本書はこれを主題としているわけではないが、可成りのページを費している。学術出版の変遷から大学教育の現況に、そして科学研究の活力の問題へと興味ある話題が展開されている。そして“学術研究の中心が大学から大学外の研究機関へ移行したと言われるが、それを出版物の上で実証した研究はない”と述べ今後の研究を促している。

かように、本書は狭義の学術書の出版の枠を出た科学論であり大学論であるが、つねに情報流通をもとにした実証的な議論であるところにユニークさがある。ついでに図書館の側から若干の意見を言わせてもらうと、著者は十進分類表をナンセンスとして斥けているが、もともとこれは本の書架上の配列を念頭において構成されていることを承知してほしい。また学術情報流通における学協会の役割についてはもっと触れてほしい気がする。

(調査及び立法考査局 竹内寿)